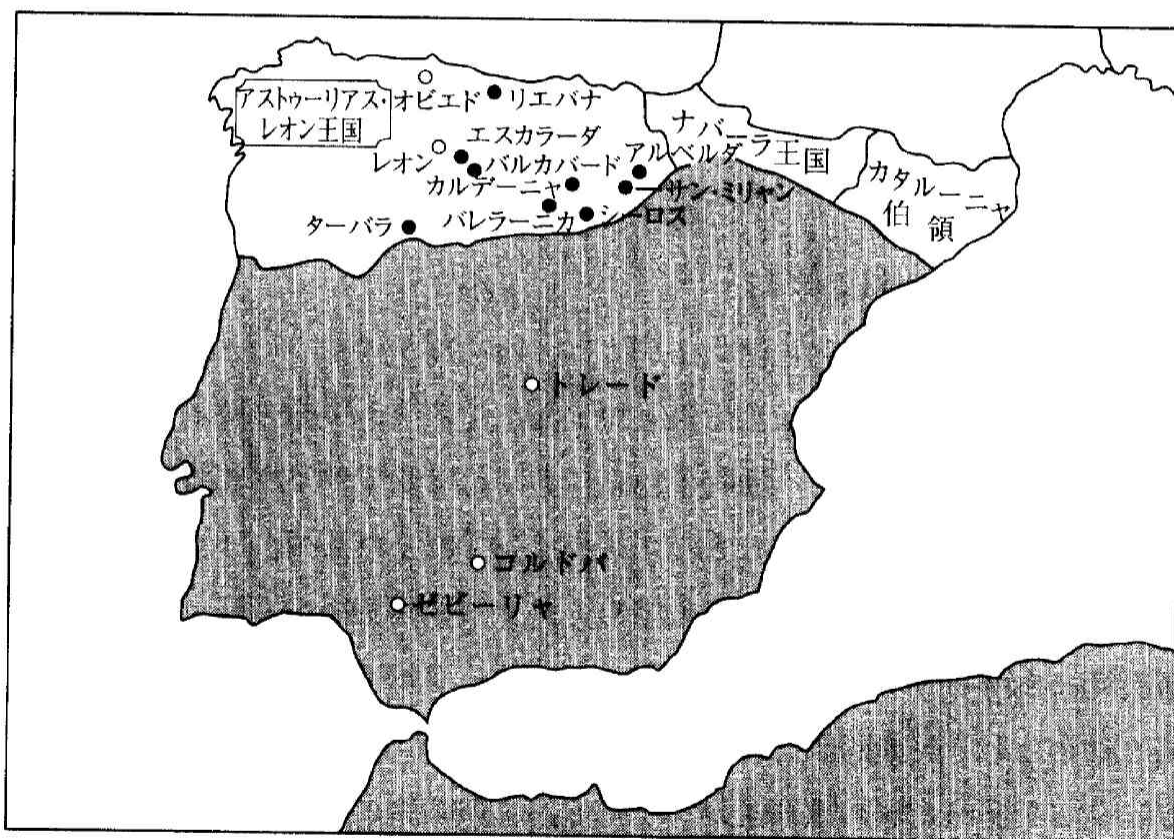


一盲象を撫でる(スペイン古写本の世界)②

——『レオンの960年聖書』 彩色絵師と時代 ——

野 間 一 正



中世前期修道院写字室

■ イスラム支配地

1. 乾 盃

一枚の絵がある(図1)。オメガの文字から生えた一本の樹の両側に二人の人物が配されており、オメガの下には兩名が互いに盃を掲げている。オメガの下の各々の頭上にしたためられた文から、左がフロレンティウス(フロレンシオ)、右がサンクティウス(サンチョ)であることがわかる。手写本製作者が自らの肖像を挿入した最初の聖書である。

恰も嵐吹きすさぶ大海の長い航海を無事終え今港に入った航海者のように、「この手写本の終りに恙無く到着することを吾々に許し給うた天の王は讃えられよ。」と、盃を手に、大業を成功裡に果たした充実感に浸りつつフロレンティウスは叫び、同じく盃を手に、弟子サンクティウスは、「吾も同じく繰り返す。神は永遠に讃えられよ。しかして吾ら兩名を天の王国に導き給わんことを。」と、応えている。これは、『レオンの聖イシドーロの西ゴート・モサーラベ聖書』または、『レオンの960年聖書』として知られている古写本の最終(514)葉を飾る絵である。

この聖書の製作者フロレンティウスは、ふんだんにミニアチュール(彩飾挿し絵)のある西ゴート聖書を模しつつも、イスラム美術の要素を加え、斬新な構図、力強いタッチ、独特の色彩にあふれた絵で手写本を飾っている。スペインに生まれ、2世紀ももたずスペインで終わった芸術、10世紀に現われ、最盛期を迎え、次の世紀には衰え始め、ロマネスク芸術の到来により、この新芸術に痕跡を残すことなく消え去ったモサーラベ芸術。そのモサーラベ芸術の精華という美術的価値からしても、また、傍註に記されたラテン語およびアラビア語の内容の重要性からしても、この聖書は稀観本中の稀観本である。

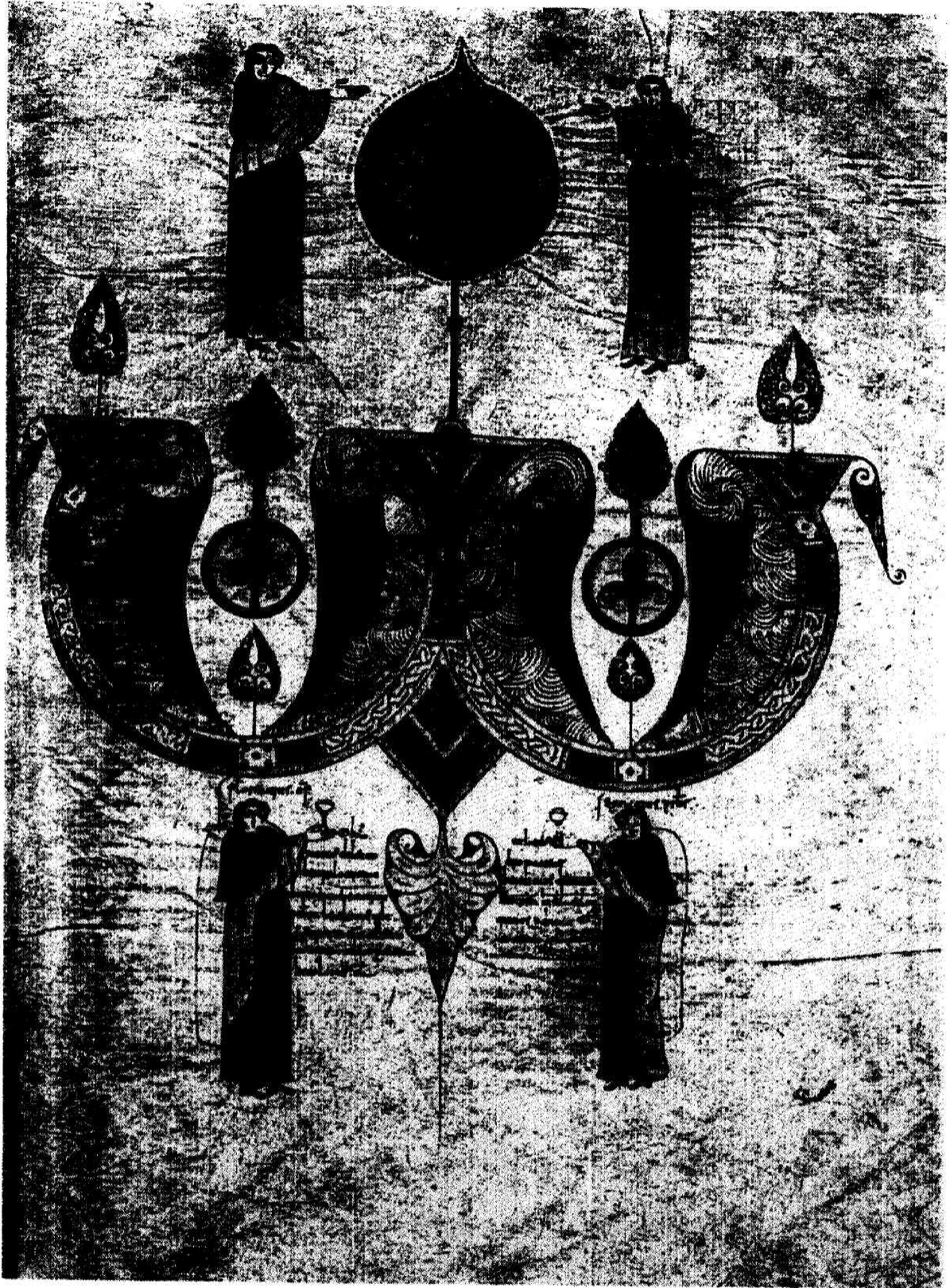


図1 盃を掲げるフロレンティウスとサンクティウス

2. 聖イシドーロ参事会聖堂縁起

父アルフォンソIII世存命中からガリシアの地を統治していたオールドーニョII世(914~924)は、兄ガルシアの死により王位を継いだ。そして、アストゥーリアス王国の領土が南へ大きく広がったため、王国全体を治めるためにも、また、国境を守るためにも、オピエドから要衝の地レオンに遷都、レオン王国と改名した(914年)。ローマ時代の遺構²⁾に築かれた当時の城壁の一部が今も残っている。

その城壁に接して王立聖イシドーロ参事会聖堂³⁾が建っている。966年洗者聖ヨハネに小さな聖堂が奉獻されたが、988年アルマンソール⁴⁾により破壊された。アルフォンソV世(998~1028)がこれを再建。その息女サンチャと夫(1031年コルドバ・カリフ帝国の崩壊により、イスラム領は多くの小タイファ王国に分裂し弱体化した。その中、トレード、セビーリャ王国などを臣従させるほど強大な力をもつに至ったレオン・カスティーリャ王)フェルナンドI世⁵⁾は、原初の基盤の上に切石の聖堂を建て、1063年12月21日、セビーリャより運んだ聖イシドーロ⁶⁾(イシドルス)の遺骸を祀った。2年後に歿したフェルナンドの後を、1085年トレードを奪取し、国境をタホ川まで南進させた、次男のアルフォンソVI世(1072~1109)と後継者により、11世紀末から12世紀初めにかけて改築ならびに大拡張がなされ、1149年聖別された。現在の聖堂の基本はこの時のものである。

地下聖堂はレオン王家の霊廟(パンテオン、図2)である。アルフォンソV世およびサンチャ・フェルナンドI世夫妻が最初に安置され、その他レオン王家の人々の奥津城となっている。どっしりとした円柱の上の柱頭は初期ロマネスクの堂々とした彫刻である。天井に描かれたフレスコ画は名高く、ロマネスクのシステイーナ礼拝堂と称されている。ヴァティカンのシステイーナ礼拝堂には旧約聖書『創世記』の物語が描かれているが、このパンテオ



図2 レオン王家のパンテオン

ンの画は新約聖書の物語をモチーフにしている。フェルナンドII世（1157～88）の御代に描かれ、殆ど完全な状態で保存されている。6つの穹窿（きゅうりゅう）天井と東西の壁を覆っている壁画は、東側中央に『全能の神』、南に『羊飼たちへのお告げ』、北に『啓示』。西側中央身廊に『最後の晩餐』、南に『幼な子殉教者』、北は壁画なし。南壁面に『受胎告知』と『聖母マリアの訪問』、次いで『主の顕現』、『エジプトへの避



図3 月曆図

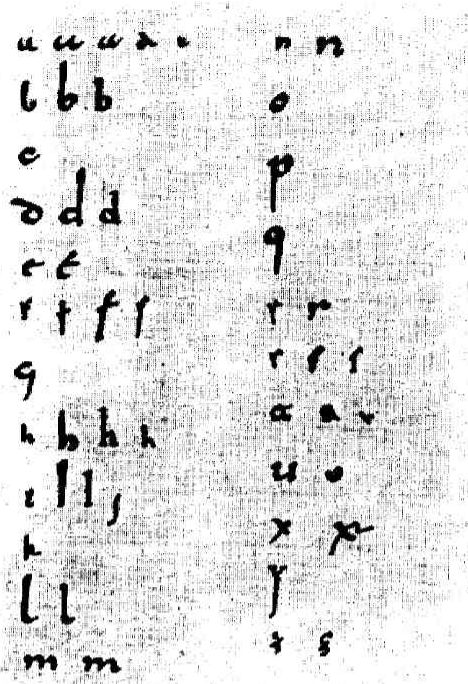


図4 西ゴート小文字アルファベット

難』、『聖母マリアの奉獻』。最後に、西壁面に『神の小羊』、『キリストの磔』。そして、月々の労働を12の円の中に描いた月暦（図3）は、上述の画とハーモニーをつくりながら、当時の農民の生活を忠実に表現していて興味深い。

3. 『960年聖書』

この参事会聖堂の附属文書館は、ミニアチュールの手写本を多数所蔵している。手写本番号2号は『960年

聖書』である。羊皮紙に書かれた手写本は、サイズが485×345mm、大変大型である。2列51行書きで、514フォリオ。文字は西ゴート小文字（図4）で記され、旧・新約聖書全巻所収。製作者は、彩飾挿し絵フロレンシオ（フロレンティウス）平修道士、写字サンチョ（サンクティウス）神父。奥付により、960年6月19日、バレラーニカ修道院においてこの手写本が完成したことがわかる。⁸⁾ 聖イシドーロ聖堂には献堂ののち移されたものと思われる。

4. モサーラベ文化

スペインの歴史を少し遡ってみよう。711年ジブラルタル海峡を渡りイベリア半島に侵入した軍勢は、西ゴート王国を亡ぼし、数年の間に半島の殆ど全土を占領するに至った。ただ、北部の峻厳なカンタブリア山脈の彼方に逃げ込んだ西ゴート貴族の一部は、その地のアストゥーリア人およびカンタブリア人の協力をえて、イスラムに屈せず、718年（または、722年）局地戦な

がら、対イスラム戦に初勝利をえ、アストゥーリアス王国を建国した。とはいえ、圧倒的な戦力のイスラムに対し、ゲリラ戦により細々ながら独立を保っていた、というのが実情だった。

一方、イスラムの占領地において、農民の多くはイスラムに改宗したが、都市住民はキリスト教を保持した。前者をレネガード⁹⁾、後者をモサーラベと称する。

モサーラベ *mozárabe* とは、アラビア語 *musta'rab* (アラブになることを望む人、またはアラブ化した人の意) に由来する語で、以下の如く用いられる。

1. イスラム支配下のスペインにおいて、都市の隔離地区に住み、教会・司法組織を含め信仰の保持を認められたキリスト教徒。一定の義務と特別の税が課された。イスラム教徒との婚姻を認めず、またイスラム教徒の召使を持つこともできなかった。
2. イスラムの文化要素を携え、北のキリスト教諸王国へ移住した上記共同体のキリスト教徒。
3. 10世紀以降キリスト教諸王国で発達した、イスラム芸術の要素を採り入れ西ゴート様式と融合した芸術様式。
4. 長年特典により、ローマ典礼に対し古西ゴート典礼を保持していた、イスラム支配下トレードのキリスト教徒。

モサーラベがイスラム文化の多大な影響をうけていたエピソードを述べたい。

- 1) 「若者がアラビア語しか知らない」と古老が嘆いている。¹⁰⁾
- 2) ラテン語が理解できずアラビア語をマスターするキリスト教徒が増えたため、モサーラベによる聖書のアラビア語への翻訳が行なわれた。¹¹⁾
- 3) モサーラベの殆どの人が、ラテン名とアラブ名の2つの名前を有していた。例えば、スペイン人司教 *Recemundo* のことを、*Rabí ben Zaid* と

いう名とラテン語 episcopus (司教) に相当する al-usqut という肩書でアラブ年代記編者は記している。¹²⁾

ダマスカスの政変により、アッバス朝によって倒されたウマイヤ王家のアブデルラフマン (I世, 756~788) は、スペインに逃れ、敵対者を破り実権を握って、コルドバに独立アミール領を創設した。彼が創めた後ウマイヤ朝は、モサーラベに対し弾圧を加え、住民の間に度々反乱が起こった。

アストゥーリアス王国のアルフォンソIII世 (866~909) がドゥエロ川岸まで国境線を拡大してからは、イスラム支配下のモサーラベが大挙してドゥエロ川北側に移住してきた。

先に 2. で述べたように、オルドーニョII世がレオンに遷都し、国境地帯のイスラムの侵入により荒廃して人の住んでいない地への入植者に特権を与えたので、有力者や修道士に導かれてドゥエロ川流域に入植する者が後をたななかった。その地に次々と修道院が建設され、新しい文化が誕生した。

一方、南のイスラム世界に眼を転ずれば、コルドバを中心に絶頂期を迎えようとしていた。アブデルラフマンIII世 (912~961) は、929年自らカリフと称し宗教面でダマスカスから独立して絶対的権力を有したのみならず、政治・軍事面でも絶大な力を誇示した。従って、レオン王国はその圧力をうけ脅威にさらされた。レオン王国に属し、前衛の役割を果たしていた、カスティーリャ伯爵領 (889年誕生) は、活力に溢れ、すぐれた戦士を生み、繁栄し、961年フェルナン・ゴンサレス (920~970) により独立伯爵領となる。

5. 彩飾挿し絵師フロレンシオ

『960年聖書』の製作者の一人、写字者サンチョ神父については、手写本の最終葉に肖像が残っているとはいえ詳細はわからない。他方、彩飾挿し絵を描いたフロレンシオは、10世紀初頭レオン王国に入植した多くのモサーラベ

共同体に混って、南から北へ移動したと思われる。幼時より写字に励んだ¹³⁾。少年期にカルデーニャ修道院に入り、絵画の技を磨き人格を形成していった。カルデーニャ修道院の写字室は名高く、そこで製作された『ゴメスの聖書』¹⁴⁾(910～914頃)(図5)を手本に見習い修業した。ただ、ここでの生活の多くのことはわからない。フロレンシオは司祭にならず平修道士で生涯を終えた。

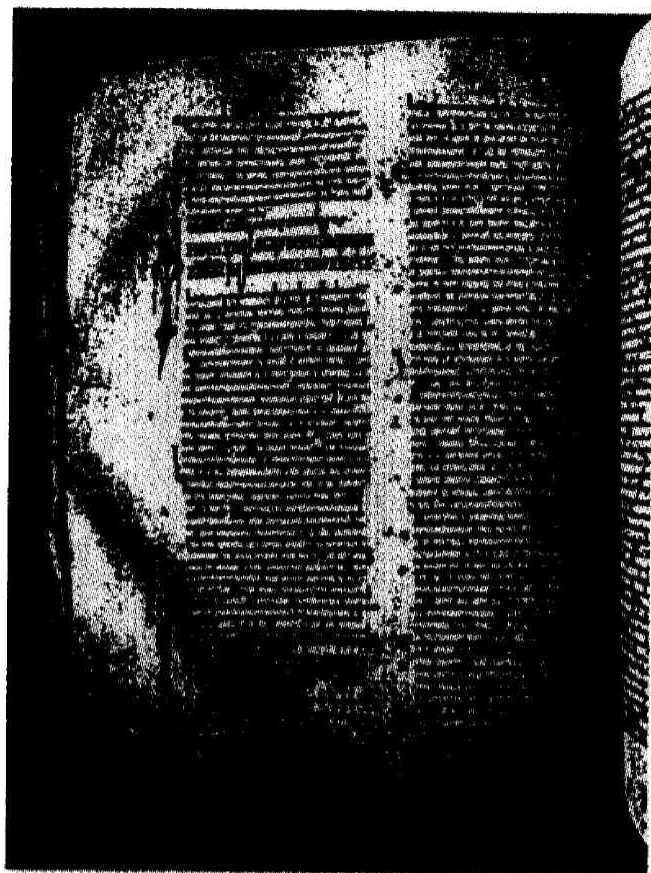


図5 「ゴメスの聖書」

フロレンシオが書記として最初に行なった仕事は、19歳の折、カスティーリャのフェルナン・ゴンサレス伯の修道院に対する贈与文書である。最初に手がけた手写本は、27歳、『オーニャの聖書』(943)である。最後の手写本は最高傑作『レオンの聖イシドロ聖書』で、脂の乗り切った42歳の時の作品である。書記として最後の署名は、978年11月24日で、59歳であった。

フロレンシオは、カスティーリャ伯書記として6通の贈与文書を記しているほか、バレラーニカ修道院の写字室で6つの手写本を製作した。その中で完全な形で残っているものは3つ、2つは数葉のみ、あとの1つは行方不明である。以下の如し。

『オーニャの聖書(943)』(Biblia de Oña)、シーロス修道院蔵。12葉半残存。J. Williamsによれば、この聖書はレオンの聖イシドロにおいて1162年



図6 『1162年聖書』

念入りにコピーされた¹⁵⁾ (図6)。

『大グレゴリウス教皇のヨブ記註解(945)』(Moralia del Job del Papa Gregorio el Grande), マドリード国立図書館蔵。

『カシオドルスの詩編註解』(Comentario de Casiodoro sobre los Salmos), レオンの王立聖イシドーロ参事会聖堂所有であったが、前世紀末略奪にあい行方不明。

『スマラグドゥスの説教集』¹⁸⁾ (Homilías a Smaragdo), コルドバ司教座聖堂蔵。モサー

ラベ助祭アボガレブ Abogalebh に贈呈。

『(ミサ中)副助祭のための読誦集』¹⁹⁾ (Liber Commicus), ブルゴス司教座聖堂蔵。数葉のみ残存。

そして、『レオン960年聖書』。

フロレンシオとサンチョが働いていたバレラーニカ修道院の写字室について多くはわからない。ただ、両人の製作した上述手写本からみると、専門知識、技術、才能に関しては、10世紀スペイン内写字室のトップにあったと言えよう。同時代ターバラ修道院の写字生エメテリオ(エメテリウス)は、鐘樓に隣接する余り快適と言えぬ写字室(図7)について、次のように述べている。

「ターバラの塔よ、石の高き塔よ！ エメテリオが3カ月にわたり、坐し、腰をかがめて作業をし、羽ペンの仕事のために手足が不自由になったのは、その最も高き場所、即ち、図書館の第1室においてである。²⁰⁾」

バレラーニカ修道院のフロレンシオとサンチョも似たような建物の中で働

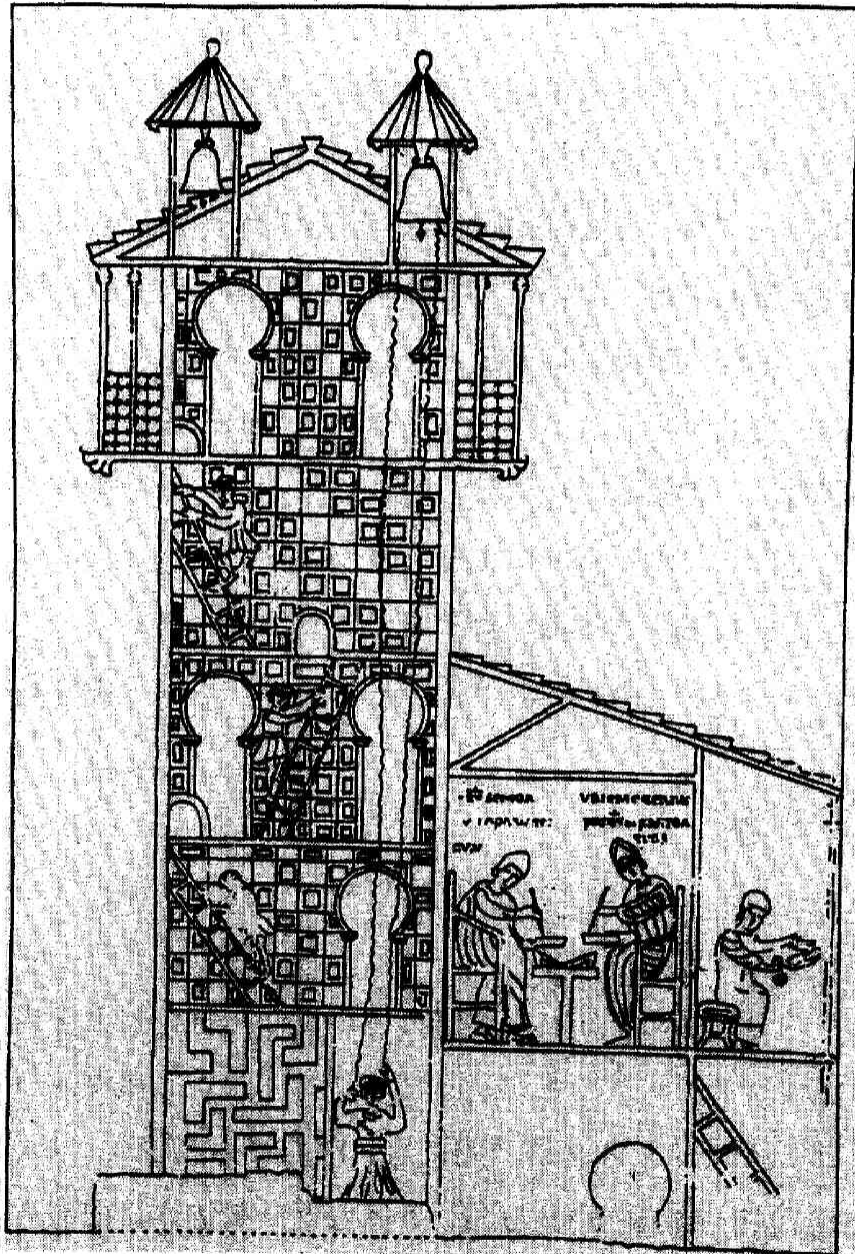


図7 ターバラ修道院の鐘樓に隣接した写字室

中世前期スペイン写字室で残されている唯一の図。中央にマイウスの弟子エメテリオと左に助手セニオール、更に右にもう一人協力者。『ターバラのベアト本』 fol. 167v.

いていたと思われる。サンチョはどの位の期間この辛気臭い仕事に耐えたかわからないが、フロレンシオは特異の才を認められていたとは言え、過激な労働は心身を消耗したので、41年間仕えたカスティーリャ伯の供をしてカスティーリャの野を逍遙していた時浩然の気を養ったに違いない。

フロレンシオは手写本をつくるために生涯を送った。この仕事のために苦心惨憺し、犠牲を払うことによって永遠の褒賞を授かることを希いながら、全身全霊を傾けた。読者に羊皮紙を丁寧に扱うようにと、苦悩する手写本製作者の祈りとも称すべき章句を口ずさんでいる。

「書くことを知らない人は、この仕事は何ほどの苦勞もないと思っている。そこで、読者諸賢に納得していただくために、写字生の仕事の酷しさについて説明したい。即ち、眼は霞み近眼となり、背中には瘤ができ、肋骨は曲がり、腹は膨み、腰は焼けるように痛み、全身打ち据えられたようになる。従って、読者諸賢、一葉一葉ゆっくりと捲りたまえ。一行一行指でなぞってはならない。なぜなら、雨あられによって折角の収穫が台なしになってしまうからである。書物に対する破廉恥な読者の行動は呪われよ。」

フロレンシオの一葉一葉に対する愛情、思い入れの程をよく表わしている。

6. ベアト本

昨年(1998年)3月末、カタルーニャ、バレンシア、クエンカを旅し帰国前日のマドリード。初めて訪れた地区のホテルから軽い昼食を摂ろうと、バールの建ち並ぶファン・ブラーボ通りに歩をすすめた。偶々入った本屋(スペインには珍しく、シエスタの時間にも日曜日にも営業している)で、《El Beato de San Miguel de Escalada》と題した一冊の本に出会った。エスカラダ(レオン市から28km)のサン・ミゲル修道院(図8)で製作されたベアト(ベアトゥス)本のファクシミル(複製本)である。

9世紀末、アルフォンソIII世は、コルドバから追放されてきた修道士たち

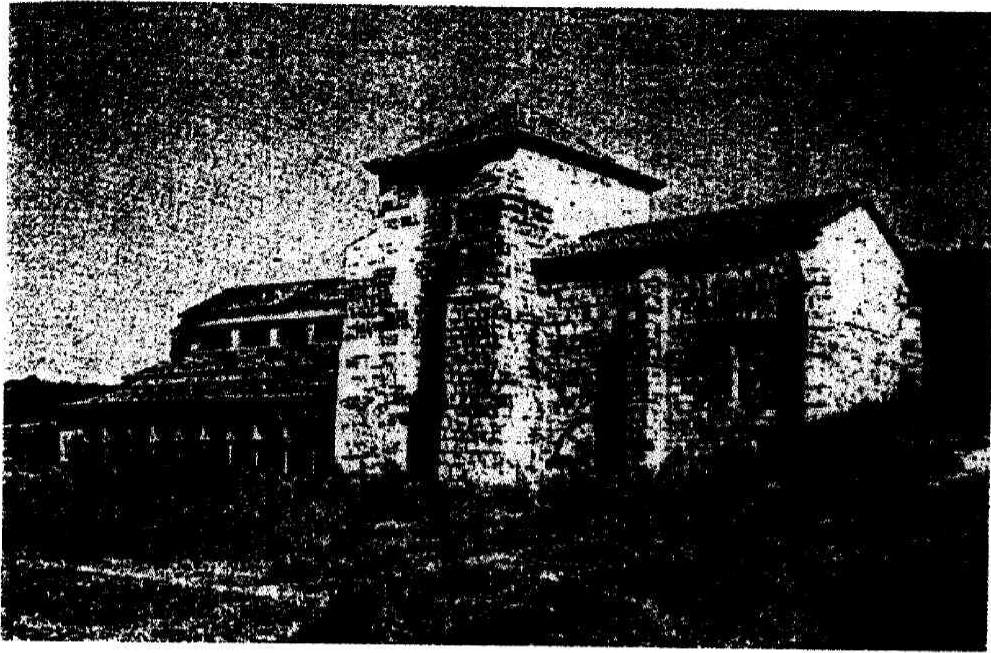


図 8 サン・ミゲル・デ・エスカラダ聖堂

に、荒廃したこの地の修道院を寄進し、再建を托した。木造天井3身廊の聖堂は、913年に献堂された。写真にみられるように、外廻廊の美しい馬蹄形アーチは、コルドバのメスキータを連想させる代表的モサーラベ建築である。この修道院で作られ、現在ニューヨークのピアポント・モーガン図書館（手写本番号644号）所蔵になるこのベアト本はいとも豪華な彩飾を施されたレオン手写本のひとつで、力強く神秘にみちている。

ベアト本とは、アストゥーリアス王国リエバナ（カンタブリア州）のサント・トリビオ修道院の修道士ベアト（ベアトゥス）が、776年に著わした『ヨハネ黙示録註解』のことである。原本は失われたが、次々とコピーが作られ、現存する手写本は34で、この他失われた手写本が少なくとも半ダースあったと考えられている。現存する最も古い手写本は、シーロス修道院所蔵の断簡（ミニアチュールのある1葉）で、9世紀最後の4半世紀のものである。ベアト本の優れた手写本の殆どは10世紀に作られたもので、数も多い。

エスカラダのサン・ミゲル本は、写字・彩飾挿し絵ともに修道士マイウス Maius（マギウスまたはマヒオ）で、製作の年代は、註から922年あるいは

926年と読めるが、ミニアチュールのスタイルから判断すると、もう少し後のものと考えられる。²¹⁾ホアキン・ゴンサレス・エチェガライによると、²²⁾952年となっている。

『960年聖書』と同時代で、同じような特徴を有しており、美術的、文書的価値によって、モサーラベ・ミニアチュールの双璧と考えられている。マイウスは、この後ターバラ修道院で別のベ아트本の製作に従事したが、968年に歿したため、弟子のエメテリオ（エメテリウス）が970年に完成させた。

7. お わ り

映画『十戒』のクライマックスでもあった、モーセがイスラエルの民を率いて海を渡る場面を、『960年聖書』のミニアチュール（図9）で見てみよう。新共同訳聖書によると、

「モーセが手を海に向かって差し伸べると、夜が明ける前に海は元の場所へ返った。エジプト軍は水の流れに逆って逃げたが、主は彼らを海へ投げ込まれた。」（出エジプト記 XIV-27）。

モーセが大きな棒を持って海水に触れると、大きな魚に混じってエジプト軍の首や手が浮上している。モーセのうしろにイスラエルの民。軍服を纏っているモーセ以外は、踵まで届く長い服の上に長いマントを羽織っている。

次に、もうひとつのミニアチュールを見てみよう（図10）。エル・エスコリアル王立サン・ロレンソ修道院所蔵になる『サン・ミリヤンのベ아트本』（10世紀末）の『小羊礼拝』の場面である。

両者を較べてみると、衣服は渦巻線もしくは螺旋状で渦巻様式とも称せられるものであり、眼は大きくアーモンド形、鼻から眉毛への描き方などとてもよく似ている。

筆者は、先述の如く、昨年3月カタルーニャを旅した。その折ヘローナ（ジローナ）を訪れた際、司教座聖堂所蔵のベ아트本（975年）を見ることができ

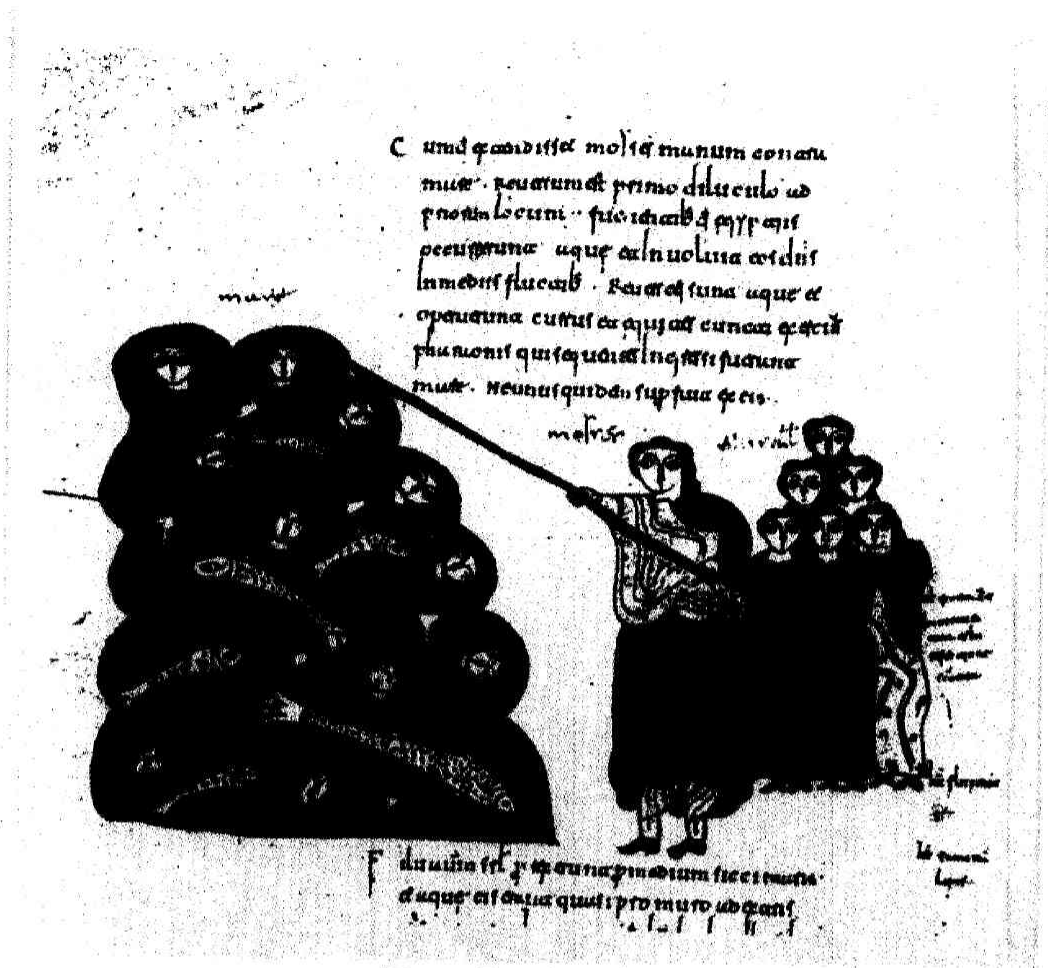


図9 「960年聖書」



図10 「サン・ミリヤンのベアト本」

た。これは970年のターバラ本を完成させたエメテリオが作ったものである。現存ベアト本はいくつかの系統に分けられているが、筆者は特に調べたわけではないのでそのことは論ずることができないが、一見した感想から述べれば、『960年聖書』のミニアチュール的人物像の描き方は、『サン・ミリャン本』のそれに非常に近く、『ヘローナ本』とは遠いということである。

喪失したベアト本の中にフロレンシオの作品があった、という説がある。『ヨハネの黙示録』は、新約聖書の最終巻であり、ベアト本はその註解である



図11 「920年聖書」

から、フロレンシオが手写本の一つを手にしたことは充分考えられるし、新たな手写本を作ったとしても不思議ではない。

また、モサーラベ美術という点からみると、レオンの司教座聖堂には、ファン（ヨハネス）・デ・アルバレスの『920年聖書』（図11）が所蔵されている。モサーラベ聖書の先駆けをなす作品である。

10世紀（中世前期）のレオン（・カスティージャ）で作られたこれら手写本に共通していることは、すべて修道院で製作されたことである。先年《イサベル女王の時禱書二つ》で論じた中世末の手写本は、都市の職人によって製作されたものであった。この中間、即ち、中世中期において宮廷において王に仕えていた画家の製作した手写本についても別稿で取り上げなければならぬであろう。

表1 現存《ベアト本》一覧表

製作年代	所蔵施設	出所	写本／断簡	ミニアチュール有／無
IX世紀	シーロス修道院	シルエーニャ(リオハ)	断簡	有
X世紀前半	マドリード国立図書館	サン・ミリャン	写本	有
952	ニューヨーク, モーガン図書館	サン・ミゲル・デ・エスカラダ	写本	有
962-970	マドリード国立歴史文書館	ターバラ修道院	写本	有
970	バリャドリード大学	バルカバード修道院	写本	有
975	ヘローナ司教座聖堂	ヘローナ司教座聖堂	写本	有
X世紀	セオ・デ・ウルヘール司教座聖堂	セオ・デ・ウルヘール司教座聖堂	写本	有
X世紀	マドリード国立図書館	不明	断簡	無
X世紀	サン・ペドロ・デ・ドゥエニャス	ドゥエニャス修道院	断簡	無
X世紀	シーロス修道院	ナーヘラ	断簡	無
X-XI世紀	エスコリアル	サン・ミリャン	写本	有
XI世紀(初)	マドリード歴史アカデミー	サン・ミリャン	写本	有

1047	マドリード国立図書館	サン・イシドーロ・デ・レオン	写本	有
1075	パリ国立図書館	サン・スヴェール修道院	写本	有
1086	ブルゴ・デ・オスマ司教座聖堂	ブルゴ・デ・オスマ司教座聖堂	写本	有
XI世紀	モンセラート修道院	サアグーン修道院	断簡	無
XI世紀	バリャドリード大法官廷	サアグーン修道院	断簡	無
1100	トリノ国立図書館	ヘローナ	写本	有
1109	大英図書館	シーロス修道院	写本	有
XII世紀(初)	ベルリン国立図書館	南イタリア	写本	有
XII世紀(初)	バルセローナ, アラゴン王国文書館	モンタレーグレのカルトゥジオ修道院	断簡	無
XII世紀(初)	ローマ, リンチェイ・アカデミー	アラゴン	写本	有
XII世紀	マンチェスター, ライランド図書館	アラゴン?	写本	有
XII世紀	サラマンカ大学	ポブレート修道院	写本	無
XII世紀	レオン県立文書館	レオン	断簡	有
1189	リスボア, トーレ・ド・トンボ文書館	サン・マメード修道院	写本	有
XII世紀(終)	パリ国立図書館	ナバーラ	写本	有
XII世紀(終)	パリ国立図書館	サン・アンドレス・アローヨ修道院	写本	有
XII-XIII世紀	マドリード国立考古学博物館	サン・ペドロ・デ・カルデーニャ修道院	断簡	有
1220	ニューヨーク, モーガン図書館	ラス・ウエルガス修道院	写本	有
XIII世紀	リスボア国立図書館	アルコバサ修道院	写本	無
XIII世紀	メキシコ国立文書館	カステイーリャ	断簡	有
1552	ヴァチカン図書館	プラセンシア本のコピー	写本	無
XVI世紀	エスコリアル	ベーレス侯爵	写本	無

上掲表は、《Obras completas de Beato de Liébana》BAC Maior (47), 1995, p. XXXII に基づいて作成した。

註

- 1) 神である主、今おられ、かつておられ、やがて来られる方、全能者がこう言われる。「わたしはアルファであり、オメガである。」(ヨハネ黙示録 I-8) 新共同訳聖書。ならびに、同書 XXI-6, XXII-13。ギリシア語の最初の文字と最後の文字。すなわち、万物の最初であり最後であるの意。
- 2) 紀元68年、ガルバ帝により第7軍団 Legion の駐屯地となる。León はこれに由来。
- 3) Real Colegiata de San Isidoro.
- 4) Almanzor (940~1002)。コルドバ・カリフの宰相・軍最高指揮官。バルセローナ、レオン、サンティアゴ・デ・コンポステーラなど破壊、略奪。その遠征は北のキリスト教諸王国にとって脅威であった。
- 5) Fernando I。レオン・カスティーリャ王 (1038~65, 1029~65)。ナバーラのサンチョ大王とカスティーリャ伯サンチョ・ガルシアの息女ムニアドーナの間に生まれた次男。1029年カスティーリャ伯(ガルシア・サンチェス)の死により、カスティーリャ伯領相続。1032年レオン王ベルムード三世の妹サンチャと婚姻。1035年カスティーリャを王国に昇格して本格的に統治。サンチャ持参の領地をベルムード三世が奪ったことから、レオン・カスティーリャ間に戦端開かれる。1037年レオン王歿。翌年フェルナンドはレオン王に即位。1065年12月27日レオンにおいて歿。《Diccionario de Historia de España ②》, Revista de Occidente, 1968, pp. 63-65.
- 6) 聖イシドーロ Isidoro (560頃~636)。セビーリャ大司教。該博な知識により、古代の学問的遺産を後世に伝え、中世キリスト教世界に多大の影響を及ぼした。著書に『起源論』など。なお、イシードロ Isidro は別人。農夫でマドリードの守護聖人。
- 7) 《España Gufa Artística en color》, Everest, 1981, pp. 330-332.
- 8) Antonio Viñayo González 《CODEX BIBLICAS LEGIONENSIS (Biblia visigótico-mozárabe de San Isidoro de León)》, Universidad de León。原寸大。旧約聖書『出エジプト記』のファクシミリ2葉(4ページ)の註釈として書かれた論文。
- 9) レネガード=イスラム侵入後イスラムに改宗した元キリスト教徒。下層階級のみならず、地位・財産を守るために貴族・有産階級の者もあった。

マウラ＝イスラムに改宗することにより自由をえた元奴隷。

ムラディー＝キリスト教徒とイスラム教徒の間に生まれた子供。時とともに増加。

J. L. Asián Peña 《Manual de Historia de España》, Bosch, 1977, pp. 70-71.

- 10) T. Terrero 《Historia de España》, Sopena, 1977, p. 73.
- 11) なお、大部分は失われたが、10世紀半ばコルドバの Isaac b. Velasco により訳されのちコピーされた福音書がレオン司教座聖堂に所蔵されている。H. Escolar 《Los manuscritos españoles》, Fundación Germán Sánchez, 1996, pp. 72-73.
- 12) 《Diccionario de Historia de España ③》, p. 1141.
- 13) このことは、モサーラベ助祭 Abogalebh に贈呈され、現在コルドバ司教座聖堂所蔵の手写本 Smaragdo の中で、フロレンシオ自ら述べている。
- 14) ブルブス司教座聖堂蔵。モサーラベ・ミニアチュールの先駆け。《Los manuscritos españoles》, p. 413.
- 15) J. Williams 《El Beato de San Miguel de Escalada》, Casariego, 1991, p. 22.
- 16) 大グレゴリウス教皇（在位590～604）。
- 17) カシオドルス（490頃～583頃）、聖人。ローマの政治家・学者。古代文化をキリスト教世界に伝達するのに貢献。
- 18) スマラグドゥス（？～82ごろ〔ママ〕）。アイルランド出身と推定されるベネディクト会修道士。シャルマーニュとルードヴィヒ敬虔帝の顧問官。聖ベネディクト修道会則の有名な会則を著わした。『キリスト教史③ 中世キリスト教の成立』講談社，1981, p. 241。
- 19) 《Los manuscritos españoles》, p. 407.
- 20) J. E. Nuño 《Historia de Arte español》, SGEL, 1996, p. 56.
- 21) J. Williams 《La miniatura española en la Alta Edad Media》, Casariego, 1987, p. 70.
- 22) 《Obras Completas de Beato de Liébana》, BAC, 1995, p. XXXII.